
バカとバカでワグナリア

SHIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとバカでワグナリア

【Nコード】

N7376Y

【作者名】

SHIN

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣とワーキングのコラボです。ババア長から頼まれた明久たちのバイト先はなんとワグナリア。小鳥遊たちが文月に来て明久たちとどのように仕事？をするのか。

うまくコラボ出来るかわかりませんが（そのうえきつと駄文になるとは思いますが）頑張るので応援お願いします。

プロローグ（前書き）

バカテスのプロローグです。

プロローグ

今日はなんて幸せな日なんだろう

この鉄人のHRが終わればぼくたちは約二ヶ月は自由なんだ!!

「よしこれが最後だ。」

明日から夏休みが始まるわけだが」

そう明日からは姫路さんたちといつでも遊べるんだ!!

「もちろんわかっているとは思うがしっかり補習には出るように」

「なんだと鉄人。」

まさか夏休みにまで学校に来させるなんて」

「それはお前らの学力が悪すぎるからだ!」

「俺は明久ほどバカじゃないぞ」

「クラス全体が低いんだばかり者。」

とまあ注意はこれぐらいにしておいて坂本に吉井後で校長室に行くように。以上だ」

鉄人はそう言って教室から出て行った

「明久に雄二よ、次はいったい何をしたんじゃ?」

「なにもやってないよ。」

ねえ雄二?」

「今回はいったいなんの用事だったんだ」

「とりあえず行った方がいいんじゃない？」

「そうですよ。」

私たちは夏休みの予定を立てておくので早く帰ってきてくださいね」

「／／もちろんだよ」

「明久、さっさと行くぞ」

「うん」

ババア side

「邪魔するぞ、ばばあ」

「全くあんたたちはノックつてもものと敬語って言う単語を知らないのかい？」

「そんなことよりいったいなんのようですか？」

「そうだったね。」

今日あんたたちを呼んだのはちよいと頼みたい事があってね」

「「丁重にお断りします」」

「まあまあそういわず内容を聞きな」

「まあ一応聞いておくとするか」

「そうだね」

「ちよいとあるところでバイトをしてほしいんだよ」

「「バイト？」」

「もちろん給料も出るよ」

「ぼくはいいと思うよ。」

雄二は？」

「そうだな。」

まあ悪い話じゃないし乗るか」

「そうかい。」

それは助かるよ。

じゃあ明後日に朝10時にワグナリア文月店に行っておくれ」

「俺たち以外の参加は却下か？」

「大人数にならなきゃ誘ってもかまわないさね」

「わかった」

「それじゃあ頼んだよ」

ガチャ

よしもういいさね

プルルル

「もしもし」

「ああ私だよ。

頼まれていたバイトの件だけど何人か行くように行ったから明後日は頼んだよ」

「ありがとう。助かるよ。じゃあ」

明久side

「お帰りなさい」

「ただいま姫路さん」

「・・・雄二遅い」

「翔子！？どうしてここに」

「・・・雄二がここに帰ってくるってわかったから」

「もちろん、僕もいるよ」

「まあいい。

とりあえずみんなに話がある」

「雄二よいったいどうしたのじゃ？」

「ああとりあえず説明するから聞いてくれ」

「事情を説明中」

「っと言うわけで一緒に来たいやつはいるか？」

「見事に全員だね」

「まあいいだろ」

「じゃあ明後日の朝10時にワグナリア文月店に集合だ」

「「「「了解^{です}（よ）」」」」」

「どうしてみんなは参加したいの？」

「・・・俺は新しい機材のため」

「それでなにをするのかは聞かないことにするよ・・・
秀吉は？」

「ワシはまあ演技の練習じゃな」

「僕はムツツリーニ君に制服を見せるためかな／＼／＼」

「ブシャアアツアアアアア」

「・・・愛子恥ずかしがるなら言わなければいい」

「恥ずかしいんじゃないよ」

「ウチは遊ぶための資金作りよ」

「いろんな理由があるんだね。」

「じゃあ姫路さんは？」

「／／それはえーっと料理の練習です」

この発言によりその場の空気が凍った

「えっと姫路さんは接客の方が向いてると思うよ」

「そうですか？わかりました。」

「じゃあそうします」

正直私は明久くんがいるから行くだけですから

「よしじゃあまあ今日は帰るか」

「そうだね」

「・・・雄二早く帰ろう」

「そうだな。」

みんな明後日は遅れるんじゃないぞ」

「ではワシは部活のものに話をつけてくるのじゃ」

「葉月がもう家にいるはずだから家は帰るわ」

「ムツツリーニ君はこのあとどうするの？」

「・・・新しいカメラを見に行く」

「僕も行っている？」

「／／勝手にしろ」

「それじゃあ早く行こうよ」

「・・・そうだな」

「それじゃあ姫路さん帰ろうか」

「そうですね」

姫路さんと二人っきりで下校
なんて幸せなんだ

そのうえ一緒にバイトも出来るなんて
でもなにか話題をふらなきゃ
そうだ

「もしかして工藤さんってムツツリーニのこと好きなのかな？」

「いっきなりどうしたんですか!？」

「そおならいいなーって思っただけだよ」

「そうなんですか」

全く人のこととなると敏感なんですね
まあいいです

明後日からはバイトで会えるので

「それじゃあ姫路さんまた明後日」

「あの明久くん」

「どうしたの？」

「明後日道に迷っちゃ行けないので一緒に行きませんか？」

「ぼくとしても助かるよ」

「じゃあ9時半にここでいいですか」

「うん」

「明久くん遅刻しないでくださいよ」

「もちろんだよ」

「お願いしますね」

そうしてぼくたちは帰っていった

いやー今日は本当になんて幸せなんだろう

夏休み姫路さんと会う口実も出来たしお金も入るし一緒に帰れるし
楽しいバイト生活が送れそうだ

この時のぼくはまだしるよしもなかった。
あんな恐ろしいことになるなんて・・・

プロローグ（後書き）

次はworkingのプロローグをのせるつもりです。
出来れば読んでやってください。

感想、アドバイスお願いします。

もう一つのプロローグ（前書き）

workingのキャラ紹介です。

たかなしそなた

小鳥遊宗田

高校一年生 フロア担当

極度のミニコン

伊波さんについて葛藤中

伊波まひる（いなみ）

高校二年生 フロア担当

小鳥遊のことが好きだが男性恐怖症（男を見ると無条件で殴ってしまふ力は無駄につよい）のせいでなかなか前に進めないでいる

種島ポプラ（たねしま）

高校二年生小鳥遊と同じ高校 フロア担当

びっくりするぐらい小さい

それを除けばしつかりもの

さとうじゅん

佐藤潤

大学生 キッチン担当

見た目は怖いが周り気を回せる優しい男性

八千代に片思い中

とじろきやちよ

轟八千代

フリーター フロアチーフ

腰に刀を刺しているところ以外は完璧

ちよっと天然ではあるがしっかりもの

；杏子ラブだが佐藤くんのことをどうみてるかわからない

白藤杏子
しらふじきょうこ

雇われ店長

もとやん

仕事をしない店長

相馬博臣
そうまひろおみ

大学生 キッチン担当

どこからか情報を仕入れてくる謎の人物
とても腹黒い

山田葵
やまだあおい

年齢不詳多分中学生 キッチン担当

山田は偽名で本名は一応知られていない
家出少女でとりあえずミスを連発する

音尾兵庫
おとおひょうご

本社の人間

本来1番地位が高いはずだが人柄と店にめったにいないことから雑
に扱われる

見た目は怖いが周りに気を回せる優しい男性

もう一つのプロローグ

「いやー今日はお客さんが少ないので暇ですねー先輩」

「そうだね」

そう言って必死に手を伸ばして皿を置こうとする先輩

「やっぱり先輩はいつもちっちゃくて可愛いですね」

「ちっちゃくないよ!!」

しばらく先輩を愛でていると急に

「キャー」

「いつ伊波さん!？」

どうしたんですか？」

「おおお男が」

「伊波さんよく見てください。」

これは空気さんじゃないですか？」

「あっ本当だ。」

空気さんお久しぶりです」

「じゃあ伊波さん着替えてきてください」

「うんそうするね」

「音尾さんお久しぶりです」

「久しぶりだね、小鳥遊君」

「今日はどうしたんですか？」

「そのことだけちょっと店長にお話があってね」

「ついに辞めさせられるんですか!？」

「ちっ違（杏子さんを辞めさせるって本当ですか？）うよ。
って轟さん人の話を聞いて。」

「店長には続けてもらおうから」

「チーフ真剣はリアルにやばいですって」

「じゃあ店長呼んできましようか？」

「私ならここだぞ」

「杏子さん」

「俺は仕事に戻りますね」

「しっかり働けよ。」

「でっ音尾どうしたんだ」

「実は本店の方から文月に店をだすからそこに何人か派遣するよう
に言われたんですよ」

「でっ私に行けと？」

「お願いしてもいいですか？」

「嫌だ。」

「お前が行け」

「そこをなんとか。」

文月には美味しいものがたくさんあるので

「食い物があるのか・・・よし任せろ」

「お願いします。」

来週の10時にこの場所に言ってください。

そこであっちのバイトの子と落ち合うことになってるので

「わかった」

「ではお願いしますよ」

「じゃあ八千代仕事が終わったら集まるように言っといてくれ」

「はい、杏子さん」

「あっ佐藤くん」

（事情説明中）

「ということなの」

「了解」

「じゃあ相馬くんにも伝えておいてね」

「珍しく店長ののろけ話聞かなくてすんだね、佐藤くん」

「相馬には言う必要ないな」

「佐藤くんひどい!!」

「どうせもうしってんだろ？」

「まあもちろん知ってるよ。」

「ちなみにかかる人も二人はわかるよ」

「へーどんな人が来るんですか？」

「小鳥遊くんやっぱり興味あるの？」

「興味といいますかこんな危険地帯で仕事してくれるのかと思います」

「そうだね」

「一人は物凄いバカでもう一人は賢いけど・・・バカな人かな」

「それってどんなだよ・・・」

「皆さんなんの話をしてるんですか？」

山田も混ぜてください」

「うーんとね」

「再び事情説明中」

「面白そうです。」

山田も行きたいです」

「多分行くことになると思うよ」

「そんなことよりさっさと運べ」

「わかりました」

「やっと終わりましたね」

「小鳥遊君お疲れ様」

「先輩こそお疲れ様です。
伊波さんもお疲れ様です」

「うん、お疲れ様」

「よし全員揃ったな。」

多分聞いたと思うが来週から文月というところに派遣に行くからそのつもりで頼む。

無理な者は明後日までに無理と言ってくれ。

連絡終了。八千代帰るぞ」

「はい、杏子さん。
みんなお疲れ様」

「よし俺も帰るか。
種島車乗るか？」

「佐藤さんいいの？」

「じゃあダメだ」

「佐藤さんの意地悪!!」

「嘘だ。」

さっさと乗れ」

「みんなおつかれー」

「先輩お疲れ様です」

「相馬さん今日こそは一緒に帰っちゃったんですか!？」

「さて伊波さん、俺達も帰りましょうか？」

「そうだね。」

山田さんお疲れ様」

「お疲れ様です」

「文月に行くの楽しみですね？」

「そうだね。

でも・・・」

「どうしたんですか？

ああ男がいないかですね？」

「うん」

「大丈夫ですよ。

俺がいるじゃないですか」

「／／／そうだね」

意味は違うってわかっていてもちよつと照れちゃうな／／／

「伊波さん顔紅いですけど大丈夫ですか？
もしかして熱でも」

「大丈夫だよ」

「そうですか。

ここでお別れですね」

「うん。

いつもありがとね」

「気にしないでいいですよ。
それではまた明日」

「うん」

そして文月に全員出発することになった

もう一つのプロローグ（後書き）

お気に入り登録してくださった皆様ありがとうございます。

こんな駄文ですがこれからも頑張るのでよろしくお願いします。

感想、アドバイスあったらお願いします。

仕事説明？（前書き）

Edualdさん感想ありがとうございます。

それではどうぞ

仕事説明？

ちゃんと姫路さんとの集合時間にも間に合いワグナリアに着いた

「姫路さんちよつと早く来すぎちゃったね」

「そうですね。」

まさか10分で着くとは思ってませんでした」

「どうしよう」

「きっと皆さんもうすぐ来ますよ」

「そうだね」

噂をすれば

「明久に姫路早いな」

「雄二こそ」

「ちよつといろいろあってな（主に翔子が原因だがな）」

「皆のものおはようなのじゃ」

「おはよう秀吉」

「ちようど島田も来たみたいじゃの」

「ごめん待った？」

「ううん、そんなことはないよ」

「・・・すまない。待たせた」

「ムツツリーニ遅かったね」

「ごめんね。」

僕のせいで遅れちゃった」

「集合時間に間にあったんだから気にするな。
それよりこれで全員集合だな」

「そうみたいだね」

「じゃあ店に入るか」

「そうだね」

どんな人がいるんだろ楽しみだな

「明久くん、どんな人がいるか楽しみですね」

「そうだね」

「バイトの方たちですか？」

「俺はここのバイトの者です。
それより中にどうぞ」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「ではついてきてください。

あと男性の方に忠告なんですけど（トン）
あっすみませんって伊波さん!？」

「キャー」

ドスン

どうしてさっきのは店員さんは殴られてるの!？」

「小鳥遊くんごめんなさい」

「いえこちらこそすみません。

それよりあの部屋なのでお願いします」

ちよっとっていうかだいぶ心配だけどとりあえず部屋に行かないとね
そしてぼくたちは扉の前に着いた。

やばい緊張してきた

「「「「「「失礼します」「」「」「」

中には女性が二人と男性が一人いた

「お前らがこっちのバイト組か。

とりあえずイスに座ってくれ。

足りない分は後ろのイスを適当に使ってくれ」

おかしいぼくの目はついにダメになってしまったのかもしれない
だって・・・帯刀してる女性なんているわけないもの

つとそんなことを思っていると雄二が

「明久、悲惨な表情をしてるってことはお前にもあの刀が見えるんだな」

「そうか雄二にも見えてるんだね。
あれっておかしいよね!？」

「ああ。」

あれは異常なはずだ。
まあ諦めるしかないか」

「そうだね」

まあムツツリーニも常にカメラを常備してるからね

「今日はよく来てくれたな。」

私はこの店長の白藤杏子だ。

私は仕事とかしないからこの二人にキッチンとフロアの説明をして
もらうからよく聞くように」

「「「「「「「はい」「」「」「」」

って店長が仕事しないっていいの!？

「佐藤くん私からいくわね」

「どうぞご勝手に」

「皆さんこんにちわ」

「「「「「「「こんにちわ」「」「」「」」

「私はフロアチーフの轟八千代です。
今日からお願いしますね。」

えーっとフロアの主な仕事はお客様にお料理を運んだりお皿を洗ったり杏子さんのパフェを作ったりするのよ」

そうなんだフロアって大変なんだな

「一応言っておくが店長にパフェを作る仕事はないからな」

えっ！？そうなの！？

なんだだまされちゃったよ

「そうね杏子さんへパフェを作るのは私の仕事よね」

「それも違うがな・・・」

まあいい。

俺はキッチンの佐藤潤だ。

とりあえずキッチンは料理を作るだけだ。

鍋とかは重いから体力があるやつにお勧めだ」

この人見た目は怖そうだけど優しい人だなー

「とまあそういうわけで今から紙を渡すからそらにどっちがいいか書いてくれ」

（紙に記入中）

「明久くんどうするんですか？」

「ぼくはどうしようかな。

姫路さんはもちろん（キッチンです）それはやめよう。
姫路さんはフロアにするべきだよ」

「明久グッジョブだ」

「・・・グッジョブ」

「そうですか？

・・・じゃあそうします。

明久くんもフロアに来てくれますか？」

「／／／／もちろんだよ」

姫路さんと一緒に仕事なんてうれしいな

「／／／／うれしいです」

「ところで雄二たちはどうするの？」

「俺はキッチンだ」

「・・・俺もキッチン」

「わしは演技のためにもフロアじゃ」

「・・・私は雄二と一緒に」

「ウチはどうしようかしら・・・
やっぱりホールにしようかしら」

「僕はどうしようかな」

ムツツリーニ君どっちがいいと思う?」

「・・・制服姿をみたい（どっちでもいい）」

「／／／じゃあそうしようかな」

ムツツリーニ本音が駄々漏れだよ・・・

「決まったみたいだな。

それじゃ休憩室でほかのやつが待ってるからそこで自己紹介をしてくれ」

「「「「「はい」「」「」「」

自己紹介か・・・

学校でのような失敗をしないようにしよう!!

このときぼくはあんなひどい自己紹介になるなんて思いもしなかった・・・

仕事説明？（後書き）

なんかキャラをあらわしていない気が・・・
どうぞアドバイスお願いします。
感想もお待ちしております。

文月の自己紹介（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございます。

いやー自己紹介は難しいー！
そんなことよりどうぞ。

文月の自己紹介

「ここだ」

「みんないい子だから心配しないでいいわよ」

あゝ緊張するな

「じゃあ入ってくれ」

どうして小学生が一人いるんだろ？

「こいつらがこっちでのバイト組だ。」

つーことで端っこのやつから紹介をしてくれ」

「ウチは島田美波です。」

フロア希望です。

帰国子女なのでたまに変な日本語があるかと思いますがよろしくお願ひします」

また歳魔か・・・

まあ伊波さんの負担が減るかな

「女の子でよかったですね」

「うん」

それになんだか仲間意識が

「次の人ですね」

「私は木下秀吉です。

フロア志望ですのでよろしくお願いします。

それと女ではなく男なのでよろしくお願いします」

!!??????

男なのか!?

「伊波さんあの方はどうなんですか？」

「えっと・・・どうだろ・・・

近づいてみないとわからないよ・・・」

「そうですか。

まあ無事を祈りましょう」

「・・・土屋康太です。

キッチン志望です。

お願いします」

静かそうな人だな

「小鳥遊君あの人とは仲良くなれそうだよ」

「相馬さんがそんなこと言うなんて珍しいですね」

「そんなことないよ」

あの子も腹が黒そうだからね☆

「工藤愛子です。

キッチン志望です。

さっきの土屋君はムツツリーニって呼んであげてください」

「・・・(ぶんぶん)」

「質問なんですがどうしてムツツリーニなんですか？」

「えーっとそれはですねー(ちらつ)
この場ではいえません」

「そうなんですか・・・」

・・・なんでいえないんだ!??
by スタッフ一同 (相馬を除く)

「坂本雄二です。」

キッチン志望です。
よろしく願います。」

なんか普通の人だな

「・・・坂本翔子です。」

きっ (待て翔子いつから坂本になったんだ!?) ちん志望です。
雄二の妻です。
よろしく願います」

「待て翔子、いつお前の夫になったんだ」

「・・・始めから」

「お二人とも社会人なんですか？」

「・・・高校二年生」

「その歳で結婚なんて出来るんですか!？」

「・・・愛があれば年齢なんて些細な問題」

「いや俺はまだ出来ないからな!!」

「ですよね」

「これ以上翔子に話させたら話が進まないの次についてください」

「じゃあ私ですね。」

姫路みじゅきでしゅ」

姫路さん緊張してるからってかみすぎだよ・・・

「そんなに緊張しなくていいよ。」

「私たちも同じ高校生だよ」

え!？」

小学生がなかったの!？」

っていうか殴られた人の顔が物凄くときめいている
どうしてだろ寒気がする・・・

「そうなんですか。」

ありがとうございます。

私は姫路瑞希です。

フロア希望です。

迷惑をおかけするかも知れませんがよろしく願いします」

よし、いよいよぼくの番だ!!

「吉井明久です。

フロア希望です。

(学園を代表するバカなので気軽にバカと呼んでください)
ちよっと秀吉何言ってるの!?

ぼくはバカじゃないのでよろしくお願いします」

「すみません。

さっき自己紹介で言い忘れていたことがありました。

さっきのでわかったかと思いますが声マネが得意です。
よろしく願います」

秀吉がなんだか満足したような表情をしている・・・

そして雄二が嫌にニヤニヤしている

そうか、きっと雄二のが秀吉に指示したんだな
いつか仕返ししてくれる

まあ今はそれよりも

「よしじゃあ次はこっちの自己紹介だ」

どんな人がいるんだろ。

でもなんだか楽しいことになりそうだね☆

文月の自己紹介（後書き）

読みにくい!!

どうしたらいいのでしょうか・・・

そして秀吉のキャラが・・・

アドバイス、感想よろしければお願いします。

workingの自己紹介(前書き)

唐笠さん、感想ありがとうございます。

今回から秀吉のしゃべり方が元に戻り、ムツツリーニが全開です（笑）

それではどうぞ

workingの自己紹介

「私から行くわよ。」

さっきも行ったけどフロアチーフの轟八千代です。

フロアでわからないことがあったらなんでも聞いてね」

轟さんか・・・

どうして帯刀しているんだろ・・・

「佐藤潤だ。」

キッチン担当だからよろしく」

なんだか無口な人だな

まあムツリーニみたいに壮大な下心を抱いているわけじゃなさそうだし気にしないでいいかな

「相馬博臣だよ。」

僕はキッチンだからわからないことがあったら聞いてね。

それとムツリーニ君は自分の本章を隠さなくてもいいよ。

それに秀吉君も無理に自分のしゃべり方を変えなくてもいいよ。」

「・・・(ブンブン)」

「それは助かるのじゃ。」

つというよりどうしてワシのしゃべり方が変とわかったのじゃ?」

本当だよ・・・

ムツリーニの本性を知ってるなんていったいないものなんだろう

「次は山田ですね。

みなさん、山田は山田葵ですよ。
フロアの先輩なのでしっかり言うことを聞くように」

山田さんか

なんだかすごそうな人だな

「次私ね。

私は種島ポプラです。

さっきも言ったけど高2だから普通にせっしてね」

いやいやどう見ても小学生でしょ

そして元気な人だな

とびはねながら自己紹介するなんて

「いでえええ

翔子・・・どうしてだ」

「・・・雄二、見ちゃだめ」

パシャパシャ

ああ、あの胸か・・・

ムツツリーニもう我慢の限界なんだね・・・

「どうして写真を撮ってるの？」

種島さんからしたらそりゃ疑問だよね
そんなことを考えていたら

「種島それはな、こんなちっちゃいやつが働いてるのが珍しいからだ」

え!?

まさかのさっきの無口な人（確か佐藤さんだったかな）がぼけた!?

「ちっちゃくないよ!!」

「あのー次私言っているのかな？」

「すまん伊波、進めてくれ」

「私は伊波まひるです。」

種島さんと同じ高2でフロア担当なのでよろしくお願いします」

「伊波さん、事実はすべて伝えてください。」

まあいいです。

俺は小鳥遊宗太です。

伊波さんとフロアの担当です。

さっき自己紹介した伊波さんは男性恐怖症なので男が近づくと（さっきの俺みたいに）殴られますので気をつけてください。

あと俺はまだ高1なので気を使わなくて結構です」

高1だったの!?

しっかりしてるな」

「これで全員だな。」

よしじゃあ今日と明日はペアで移動して仕事を覚えてもらうようにするからな。

それじゃあペアを発表するから聞けよ。

まずはフロアから、

小鳥遊と吉井

種島と姫路

伊波と島田

山田と木下

八千代と工藤と霧島

工藤と霧島はすまんがフロアに行ってくれ」

「「わかりました」」

「次はキッチンな。

相馬と土屋

佐藤と坂本

でいくからな。以上」

「……雄二は私と一緒に仕事できなくて残念？」

「せいせいする」

「……残念に思わないとだめ」

「いぎゃああああ」

「どうしてそれで目をつく!?!?」

「ちっ、リア充爆発しろ」

「佐藤さんどうしたんですか」

小鳥遊さんが佐藤さんになにか言ってるけど
どんな仕事があるんだろ？

楽しみだな

明久は仕事を覚えな

BY雄二

workingの自己紹介(後書き)

無駄に杏子さんがしっかりしている・・・

まあいつか。どうせすぐめっきなんてはがれるし・・・

感想、アドバイスお願いします。

仕事説明（前書き）

どうもお久しぶりです・・・

まず謝罪から

更新遅れて本当にすみません。

模試も終わったのでまた連載スタートします。

（相変わらず亀更新

ですが・・・）

ではどうぞ

仕事説明

明久・小鳥遊side

みんな仕事を教えてもらうためそれぞれの相手についていった

「じゃあ俺らも行きましょうか」

「よろしくね、小鳥遊くん」

「吉井さんはなにが得意ですか？」

「ゲーム!!」

「いえそうじゃなくて。」

例えば食器洗いとか料理とか」

「そっちな!？」

ごめんね。

えーっと家事は一通り全部出来るよ」

「そうなんですか。」

じゃあ普段あまりしないことから教えますね」

「頑張って覚えるよ」

「頑張ってください。」

あとメモをとったら忘れても思いだせますよ」

「なるほど。」

小鳥遊くんは賢いね」

「そんなことはありませんよ。」

そんなことより行きましようか」

「うん」

〽玄関に到着〽

「まずここでお客様が着たらここで出迎えます」

「玄関で出迎えると」

「じゃあ俺の真似をしてくださいね。
いらっしやいませ。」

何名様ですか？

おタバコはお吸いになりますか？
ではこちらにどうぞ。
わかりましたか？」

「うん。」

やってみるね」

「じゃあ俺がお客として入ってくるので出迎えてください」

「わかったよ」

〽小鳥遊が入ってくる〽

「いらっしやいませ。
何名様でしょうか？」

「3に（おタバコはお吸いになりますか？では）ちょっと待ってください」

「どうしたの？」

「ちゃんと相手の反応を待ってください」

「ごめんね。」

「ちょっと緊張しちゃって忘れてたよ」

「お願いしますよ」

「うん」

今度はうまくいった
ちよつと緊張するけどこれなら大丈夫かな

「じゃあ次に行きましょうか」

「うん」

「あそこのテーブルで注文のとり方を教えますね」

「よろしくね。」

って小鳥遊くん、前前」

「え？」

「キャー」

ボコーーーーーー

「ごめん小鳥遊君、大丈夫？」

「はい・・・」

「ほんとごめんね」

「いいですよ。」

それよりがんばって教えてくださいな

「うん」

「それではまた後で」

明久・小鳥遊 side out

美波・まひる side

以外ね

仕事とかなんでも出来るまひるがこんなに落ち込むなんて

あっちなみにどうしてまひるって呼んでるかという

同じ年だから名前でもいいって言った

私も下の名前でもいいといわれたからだ

「まひる、どうしてそんなに落ち込んでるの？」

「ううん、なんでもないの・・・」

「まさか小鳥遊くんのことが？」

／／／

「そういうことね。」

やっぱりうち達は似たもの同氏なのね」

「?どうして？」

私は置いというて美波ちゃんは男性恐怖症じゃないし大丈夫じゃないの?」

「ううん。」

うちは照れ隠しで関節技をかけちゃうの・・・」

「私もたまに照れ隠しで殴っちゃって・・・」

「お互い苦労してるのね」

「そうみたいだね。」

それで美波ちゃんの好きな人って誰なの?」

／／／

「いやならいいんだよ」

「うちの好きな人はアキよ」

「アキって誰?」

「吉井よ」

「あの子やさしそうだもんね」

「そうなのよ。」

「そうだまひる、どこで今日は寝るの？」

「ここだよ」

「じゃあ今日家に泊まりに来ない？」

「いろいろ聞きたいし」

「え!?!」

「いいの？」

「もちろんよ」

「ありがとう。」

「じゃあこれが終わったらいくね」

「そうと決まれば残りも教えてね」

「うん。」

「頑張って覚えてね」

「もちろんよ」

美波・まひる side out

明久・小鳥遊 side

「小鳥遊くんって伊波さんとなにかあるの？」

「え？」

「どうしてですか？」

「いや特に理由はないんだけど、伊波さんと話してるときの小鳥遊くんの顔がちよっとほころんでいたから」

「本当ですか!？」

「そんなはずはない」

伊波さんは犬なんだ

「そう俺は小さいものが好きなんだ!!!」

「いきなりどうしたの!？」

「いえなんでもないです・・・では注文のとり方をやりましょう」

「よろしくね」

そこからしっかりと注文のとり方を教えてもらった機械の操作がちよっと複雑だから心配だけどきっと大丈夫!ぼくはバカじゃないから!!!!!

「じゃあ次はパフェの作り方を教えますね」

「うん。」

「・・・ってパフェを作るの!？」

「？」

はいそうですよ？」

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい
これはまずいぞ

「ここに食べられないものってありますか？」

「特にありませんよ」

「そうですか・・・」

それなら安心かな？

ぼくの希望は無残にも打ち碎かれた

「先輩そんなにつかれきってどうしたんですか!？」

「かたなし君私はあまりにも無力だよ」

「いったいどうしたんですか？」

「種島さん、姫路さんはどうですか？」

「吉井君だよね？」

瑞希ちゃんは杏子さんを倒したよ」

「え!？」

店長がどうしたんですか？」

「瑞希ちゃんの作ったパフェを食べて倒れちゃった」

早速犠牲者が出ちゃったか・・・

「それで今姫路さんはどうしてるんですか？」

「杏子さんを看護してるよ」

「落ち着いて聞いてください。」

姫路さんは必殺料理人なんです」

「「必殺料理人！」」

「はい」

「あの吉井さん、必殺料理人ってなんですか？」

「それは」

「あっ明久くん」

「姫路さんパフェに何を入れたの？」

「それはですね・・・」

「ぼくのいってる意味がわかりましたか？」

二人が青ざめている

まあそうなるよね

「みつ瑞樹ちゃんこれからはパフエを作らなくてもいいよ」

「これもお仕事なので頑張りますよ!」

「えーっと・・・」

「姫路さんは接客に専念してよ」

「どうしてですか?」

「姫路さんはずっと接客してた方がお客さんも喜ぶよ」

「吉井くんどうしてですか?」

「そのほら!」

姫路さんはかわいいから!」

「／／／／／そんなかわいいだなんて。

じゃあ吉井くんも接客に専念するべきですね」

「ほえ?」

「どうして?」

「だって吉井くんはかっこいいじゃないですか」

「／／／／／そそそそんなことないよ」

「そんなことありますよ!」

「つていまは」

（会話を聞いている小鳥遊 side）

「先輩、

あの二人って付き合っていないんですね？」

「うん…

そのはずだよ」

「ですよね…」

「小鳥遊君は吉井君がどう思ってるか聞いてきて！
そしたら休憩室に行って作戦会議だよ！」

「あっ先輩…

行っちゃったか…

それにしてもお節介をやかこうしてる先輩もかわいいな」

side out

姫路さんのパフェ……一体どうなることやら

「じゃあ吉井さん、パフェが終わったら休憩に行きましょうか」

「了解」

（パフェ説明中）

「パフェは問題ないですね」

「料理は得意だから問題ないよ」

「それじゃあ休憩行きましょうか」
そろそろ先輩も入ったことだろ

「うん」

こうして俺達は休憩に入っていた

しかしこのときの俺はまだしらなかった
こんなカオスな休憩になるなんて・・・

仕事説明（後書き）

久しぶり過ぎてもうなにがなんだか・・・
本当にすみません。

次回からはもうちょっとマシに仕上げます。

感想、アドバイスよろしければお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376y/>

バカとバカでワグナリア

2012年1月13日19時57分発行